



開國起原

リ印5
2110
25



待
2110
25



開國起原卷二十四

各國公使更代并祝砲

第三十号

千八百六十二年第三月十八日江戸不列顛使

臣館して外國事務宰相台下小呈を

余謹て女王より大君小贈を不書簡と余に

大君小拜謁を願ふ日下於於言上との荷蘭譯

文を台下小呈と○又第二十九号の原文をも
呈と此ハ他日暇を得て其の政府蘭譯文と
共小贈らさふもろあり恐惶敬白

不列顛殿下の特派公使兼全權ミニストル

リエテルホルトアールコック 年記

日本在留書記官

エル、 エウステン

女王殿下より大君殿下小贈らふ書簡の譯文
大不列顛と愛倫の連合國女王法教等々

海舟書屋

こ乃守護者天命を奉る所ヒクトリア
我の良兄弟又従兄弟高貴威勢有る者
ふプリンス日本大君殿下より呈して恭
敬を表す

高貴威勢プリンスよ

余殿下より近頃余小贈らふ書簡と落し
且但ニ此書中ふ余と殿下と條約と取結
く以来惣て其定則通り小行ふと雖も殿下の
政府より我のミニストル、リエテルホルトア
ールコック小告げ給ふ理合の為殿下條約

某乃定則を一時間延引せんと欲し給ふ由
を記載せり○余貴簡中小於て其友愛の情
状見よ余も真小之を後謝しよき所
あり○余條約中殿下乃示せ不定則小付リ
ユテルホルト、アールコック小命令を下し
多り而して彼レ我レ命令小従て尚其他殿下
小對して我レ友愛と兩國及び其臣民乃和交
を催進しよ我レ切ふ於情とを表しよき報告
を殿下の政府に為よきとを保證す○是故小
余上帝乃殿下を保護せんよ祈ふ

海舟書屋

千八百六十一年即我レ治世の第二十二年第
十二月六日ウイントツル城乃王宮小て與ふ
あり

殿下の愛姉妹又従姉妹

ヒクトリア、ル、 年記

リエツセル 并小年記と

アールコック君より大君殿下小呈よふ

言上の譯文千八百六十二年第三月二十日

余謹て大君殿下小女王殿下より好んで贈り多

ふ書簡を呈と

又余謹て大君小女王の允ふて余の英國に退
去を候を報し且候る不在中キヤルヂダツへ
ールふふウエルエーデルゲストレンゲへー
ル敬ウインツエストルを殿下小謁見せしむ
余今般殿下小女王殿下の手記せふ國書中小
見ゆる好意と友愛を更ふ表し又余自己の名
ふて殿下の首尾能く整ひ給へふ婚姻と賀し
又殿下乃幸福と日本の安全和平と只管小禱
候

海舟書屋

頼利太泥亞特派公使全權ミニストル

エキセルレンシー

ルーセルホールアルコックに

貴國三月十八日附三十号の書翰落しせり貴
國マリーエステイト女王乃書翰譯文并其許
大君謁見の節口上より寫と添て申越ふ、條委
曲兼諾せり別 大君上意振り寫を贈ふ間領
兼有之度右答書如斯候拜具謹言

年月日

久世大和守 花押

追啓貴國第二十九号ノ原文ハ差越爲當ニ

上意振

書翰差越申聞ヨ越兼ハ兩國ノ懇親彌
厚ハ不慮ノ心ヨ是モ太儀

文久二壬戌年二月十日ニニストル、アールコツ
クヨリ差出候書翰ノ内

此度歸國致候ニ付不日女王ノ書翰を呈進ノ

て

大君殿下小別を告げ且後任たふチャルゼダ
フヘールウインチエストルノ謁見をも相願
度趣申立候

同月十六日於對馬守宅大和守ニニストルア
ルコツクハ對話

此方

来ル廿日頃拜謁可被仰出ク存以右登城ノ節
ニ警備向一ト際嚴重可申付以間騎兵召連以
儀ニ見合ハ松致度此節柄人氣ノ折合方不モ

三十三
差響不都合候儀之有之候旨申談

彼方

右々奉國女王より被差許銘々其格式を以召
連候隨從者故残一並に訊こく相成意に委
細く儀々猶外國奉行に談判可致旨申出候

同月十七日於東禪寺村垣淡路守大久保越中守
書記官エースデンに對話

一今日引合に筋々其之ニストル

大君拜謁候儀に付荒増儀に續等し入度ニ
ストル出席被致候哉エースデンに對話通候哉

海舟書屋

昨今出帆前取込居候間一應私相伺不相分
儀々可申通候

一此度拜謁之時々兩之ニストル小候哉

左様ニ此度儀古之ニストルも清暇乞申上國
書持系新之ニストルも初て御目見奉願候

一左候々繪圖々而可申入候

此時繪系指し示委細演説

此外候儀々以前と相違々無之哉沙殿も同所
之儀哉

一替置候儀々之候

以前拜謁ノ節ハ西丸ニ座シ

一西丸ニ而モ所奉丸ニ而モ間席ト同様ニ

今朝蘭コニシエル并海軍士官遊歩ノ節大

名ノ家ト思ヒキ屋敷有之ヲ認め右ニ過

日ノ見知り居候ニ此度何故欽新小普請

以多クハ要前ト同様ノ家造ヲ小出来候

由先刻吐ニ座シ左候ハハ談ノも同様

小有之ハ

歐羅巴風小ハハ、兩人トモ一所ニ拜謁以多

ク候

一歐羅巴ノ左座ニ候トモ日本ノ風習小テ至極

々禮式ヲ正シ一人ツ、嚴密小以多ク候是モ

敬禮ヲ表ス侍事ニ候

法繪圖一應ニニストルハ一見為致度ハ同様

時以休息

此時退座

至極ヲ以テ新ニニストル儀ニ階階モ

異リチャルトタツベル小座ハ間同席ニ

而モ不都合ト存シ併言上振キ変モ同様不

致ハ而ト又不都合ト被存候

一言上も古ニコストル計ニハ哉

私もアールコツク計と存候所共尚尋可申候

此度もニコストル館附士官も有之故私外兩人居出度ハ尤歐羅巴一般ノ儀ニ有之ハ

一エースデニ小ニ圖書持来被致ハ事故其席ニ出席も正致不悪ハ所共我國風ニ而其儀も出来不申候

在併此度出使節歐羅巴ニ被遣ハ而も拜謁ノ節ニ此三人共出席ニ出被成ハ

一夫ニ使節ノ者ニ夫夫ノ職掌委任等者之故ノ事無用ノ者ニ日本ニて之出席不致候假令附屬ノ者連も

大君ノ出席ハ出ル儀も至リ来ニハエースデニ之茶中入ル通り書記官ノ席ニ白圖書持来ニ致居ル者出席ニ致其余有人ト知不近ニ宜ハ皆是も其國ノノ習俗者不忌推考者ノ度ハ
ニニストルニ可申旨ニ而退座

拜謁ノ儀ニ付被是申上候而も夜早間合も毎之候然不彼是ト上ハても尚又沙苑中

方は被仰立等無益に同自國に歸るに後
使節は地方に委細可申上候

一此度とユースデン計小候

併し加所迄は外西人も召連度は既小此以前
も神奈川コンシエル士官西人程も罷出は式
相済全くは拂と相成り而酒井隠岐守業内被
致沙席拜見迄も仕候

一右等と激と拙者共心得居候

拜謁刻限は何時に裁

一沖城は十時位に而宣候

私心得候こと此以前も八時位と存候以
前も速小相済は同此度も速小相済候程に
多し度左候に直り横濱に参り候

一拜謁は砌馬に而被出候程被申上り得共拙者
共附添いたしは事故如何しも馬に下りて早き
を厭ひ迷惑は多しは同駕籠に被致度左候に
左候等と都合宣候

左候に馬に而極く遅く仕候決して駕籠に
乗石申何事あるは首と切り申上候

一駕籠に而は爰下りて下乗馬に而は爰下りて下馬に

委細繪図さし示す

以前拜謁の節も下馬の摸松拜見仕り

此時ユースデン繪図差出ス此より即席の
而繪図認差示ス

前此談者之候駕籠の儀之ニストル取用候
も難計間尚申入座候

此時退座

以前拜謁の節も八時と心得候共此度八致
し方無之十時之迄城に着仕り而宣候哉

一丈ふて宣候

海舟書屋

駕籠の儀申入候共江戸在留中へ決して駕

籠は一切不用と申候

一丈之而も困り入候何れも隼人正の駿河より内同
道可致間極く遅き方頼入候同役共是駕籠不
以間被心得至度候

兼知仕極く持是こいたし候

一奉り下乗いたし候其許等も下馬候
以候は心得置度候

此時繪図指し示談判の上退座

沙間取し處も暇と心得不申候共以前拜

江馬取らせ度候拜謁後返却に而宜候

難有候

一昨日大和守より召連に騎馬隊に候申入候事
有之右に之ニストル亦も被歩漸候程以迄
度以

右に候に兼引不仕拜謁と有之にハ、猶更騎
兵も益し以とも治談しに候に兼伏仕間敷
候

一夫之礼亦も有之に得共以前拜謁に節も騎兵
之之間此度も無之程以たに度以

海舟書屋

以前各々之間召連不申候

一尤に候得共此以前も無之大和守より申述
至又拙者共亦も申談に事故不召連程以迄
度事實各國に風習を兼知いたし居に者各宜
以得共遂に之自國に人心に差嘗折角政府に
敬礼を盡しに召連候に却て不都合と相成候
候而も其詮無之又警海筋に變に此方控ても
一除嚴重に以たしに事故能々日本人に情を
熟考被致にニストルに申入らせ度候
萬と相談可仕に得共心にも止め以哉に知也

不申以言上振等之及譯之上明日可差也

一兼知以多一候

此時退座

騎兵之候申少以將去之ニストル少之何と

も應一之候

一夫少之冬甚困り入候明日吾兼是度以間今夜

二而も好き松子見計茶話之節少ても其許

騎兵之候說得頼入候

今夜食事之節松子見計中聞吾之候之宿

寺詰に申上座候

一假令不兼知連捨置候儀出来不申又明日之而

も拙者共出張以多一懇談之及候事故其許右

等之要能々了解セリ是周旋之而少濟候頼

入候

一為念尚又中入候下馬并席之變繪圖少て示

くは通し萬と被心得哉

委細兼知仕候

一拝謁濟直之横濱に於系以松右之陸之候哉又

之船之而被系以哉

陸通り不仕座候

一左候ハ、祝砲ヲ横濱ニ打ル哉

左松ノ由症ハ

一日奉ル出立致シ、是レ日冬何頃ニ候哉

此時退座

廿日小神奈川ニ陸路相越シ、廿三日同所出帆

以、候強而祝砲相願ハ儀ニテ云之ハ

一左候ハ、不打シテ不敬亦不相成事ナリ候ハ、

未レ日本ノ規則も不定ニ事故左松ハ、一度ハ

此度出帆以、ハハも全く私ニ而國王ハ乞ハ

ハ事ナテ公ハ、ニニストル職を他人ニ譲リ再

海舟書屋

ハ所國ハ不系ト申譯ニモ無之實ニ再ハ

所國ハ渡来仕ハも難計候

一左松ニ候哉

同十八日大和守對馬守ハ、ニニストル、アールコツク

ハ相違ハ書翰

本明廿日 大君謁見被仰出ハ間後任ニ者召

連四ツ時登城可者之旨申遣ス

同十九日於東禪寺村垣淡路ヲ一色山城ヲシヤル

セダフヘールウインチエストル書記官ユースデ

彼方

拜謁席に儀に付今日又と語談く趣にニストル
 に申す候事此程に種々瑣末に語談判乃に有
 之殊小此以前より等 大君との語間合余程遠
 く相成るゝ事少て拜謁仕候而してニストルに
 位階を落し申候此度本國に被差越に使節方
 女王に謁見し節に手を握り候程に接近致し
 可申然る小津國少て冬駕と拜顔も難出来程
 隔り居語り語輕蔑に語取扱に付甚耻辱と存

此方

儀最早如何に語談此座に共登城に不仕音申出
 西城に此子候に事故此座に例に難相成亞米
 利加之ニストル拜謁に節も同様に席に有之
 決して輕蔑致し譯に之無之吾國從來に規則
 も有之歐羅巴に風習同様に難相成明日に
 儀に既小 大君にも此用意有之諸大名も登
 城に心得に有之に事今更右様に儀被申す候
 而してニストルに秋後小相聞吾國一同に氣
 配にも拘り甚不都合小有之候間何と致勤弁

以多しは取計旨再三申談は済共何分兼
伏不致候

同廿日大和守對馬守よりニニストル、アールコ
ツクは相違ひ書翰

謁見は禮典外國奉初を以談判は上日限等取
極候事不都合は儀有之延引相成者ハ双方
事情摸通り兼此事ともは存此方控て更小隔
意無之候間猶ウイニチエストルは進々可及引
合旨申遣

同日ニニストル、アールコツクより差出は書翰

拝謁席は儀ニ付は談判中不都合出来は更最早
帰國の期ニ差迫居諸事取計兼はニ付は送憾
女王は書翰とみ川から進呈は存子能はは仍
而右書翰はウイニチエストル小托一萬端所
至せしむるしとの趣申立候

同廿一日横濱ニニストル館控て酒井右京亮ア
ールコツク對話

此方

昨日は拝謁可被致答は更談判は違有之登城
不致送憾は存は先年拝謁は儀中ニ候節

西域之儀子校之而一併之礼典未夕不整之付
及以是委拜謁之ハ正致以侍之宜しき趣之而
強而正願以之付其通取計以ハ共此度之大城
にて礼典相整以度委向も西城之も廣狭之違
ハ有之先年之振合と冬譯違ハ申候然も西
城之節も大君と之同合程進之有之此度
相渡候繪圖面之而も空席一間と隔九三十フ
トトも離も居右席之而拜謁致し以而も輕蔑
之取扱を受以之相當り其許面目もハハハ
星候之付拜謁之取扱振改草有之度旨法申少

海舟書屋

二五七

以得共此方ハ有て冬大君以度席之距離を
以て礼典之立候譯之も無之度席子校之候得
之無接切近以之ハ子廣小以得之自然懸隔候
儀之而決して輕蔑致以筋之も無之尤後末拜
謁之節も猶談判之と可成ハ都合よく取計可
申間右等ハ違之廉萬と了解以致度旨相諭
也

彼方

此儘之而歸國以多ハ以得之實も此輕蔑之
取扱之付其段本國政府に申遣以より外無之

は要今日懸々當所は法越相成隨々法談判之
趣之而法輕蔑之態之隨々相分り候昨日拜謁
致し以而不都合を生し以よりと拜謁不仕候
而歸國致し方却而女王に對し都合宜敷候後
任し者拜謁し節々可成丈々法同進く相進之
以松願度旨申出候

英國公使の意見書

日本に於て額利太泥亜之ニストル乃職務を
辭し以前日本の安全幸福を思ふ厚意と表せ

海舟書屋

人為め日本と外國との交際小付存意申述度
候

此事件を指し緊要乃儀之付法老中方萬と法
弁解有之度事之に同此書面次の會合まで法
熟考有之に松相願し

此三年江戸逗留中法國人心く儀之付種々
兼り申候者人心外國人との交際小相成り候
趣は談者之に

法國人帶刀以多し以者の外國人小對し惡意
を懐き居し儀を見附法互に法共死人惡意を

懐き居候證據甚稀か係事小有之は若下賤
 くも乃惡意有之とも夫を拾列く事之無之候
 外國人如何く取扱を受候と免角小帶刀以
 しはもの若くは政府に役人小有之は右役人
 候他人よりも多く惡意の證拠を相頭く粗畧
 く取扱く而外國人と相煩く中は右等く候こ
 有度々嚴しく愁訴以ぬくは済共曾而十分く
 變革無之候

右く候も悉く外國人く心小感激以たく候事
 若く有之は得て此國人外小人を仇視以ぬく

以説を十分信用難致は右も畢竟此國政府ニ
 今年中條約小相戻り候をも其儘は差置り故
 く候之有之候若此國政府小於て事實條約面
 施行は成外國人如何く取扱と受さ候扱との
 此趣意こはり、夫ら為先此要置り品も可有
 之は外國ニニストル小於て是相察中は右外
 國人保護筋不行届く候も此小政府之而力を
 不被盡故小や又是威權無之故小や何小致し
 以而も外國人の信用を失ひ候之有之は
 一併く事情右く通之有之候也

大君之於條約中乃箇條延引之儀條約國々
に被作入の儀共向後に見据も難附の付外
國之ニストル兼諾不致隨之敢而治不審小も
被思召間敷の尤是迄もは仰少の趣意取調條
約中之箇條延引可致哉否勘考可致の右此國
政府より被仰開の趣意を左に通

物價高直之事

人心不居合之事

兩國懇親の破れ且内乱にて政府乃安危

難計事

右に次第に西港兩都延期の儀不得止被仰入
候儀之有之也

右此開港の而物價高直の儀に別段取調り不
及外國之ニストル疾ふ兼知の儀之有之候右
物價高直より不折合を生之外國人而已か
ら此此國政府をも恨之候證拠を以て實
檢不致の得とも先ツ夫々見据の而も右を
以西港兩都延期の趣意とハ難に思ひ物價
乾中米價高直の而人心不折合より終り此國
政府危難ふも可及との儀を相察し西港兩都

延期承諾致しはとも如何して向後の折合方
 仍届可申哉若兩港支都延期小至り候ハハ外
 國人と仇視以多し候儀弥増可申々奉存ハ
 涉國人ハ内外國交際相破舊來ハ習風小之ハ
 廢リハハ希候者有之ハ儀冬相違も毎之ハ得
 共當今の時勢右希望ハ通り相成可申哉三百
 年前之ハ右希望ハ通り相成可申其故ハ外國
 乃威力當今ハ通り小備ハ且且蒸氣船も毎之
 二付涉國を鎖ハハ儀容易ハ事ハ有之候然ハ
 變當今ハ各國交通以多ハハ兩大國ハ間ハ有

之候得ハ和戦ハ兩條以ハハ致毎之ハ而ハ相
 叶難キ事ハ候間和親ハ方法採用ハ相成候
 往年ハ外國との和親交際ハ跡相成ハハ左様
 六ヶ敷儀ハも毎之ハ變當今ハ至リ候ハハ十
 倍六ヶ變相成申ハ其故ハ大國ハ條約ハ反結
 相成ハ事有之候然ハ右條約施行ハ付而ハ
 政府ハ煩苦有之ハ得共若外國ハ軍艦差向
 港を遮リ通商ハ船ハ差止米等ハ輸送を障リ
 候節ハ其煩苦如何計リ候哉此内考可者之ハ
 右煩苦種重者之何モハ取用ハ不相成候而

と相叶難き場合之有之候

右煩苦輕重兩條共不取陽小條約施行之件を
致し陰小右施行を妨ぐもの可省之哉も難計
沙國政府も右條之趣意之有之哉も懸念
致し且此西人外國人との交際此上弥厚く相
成らざる内之諸事十分の場合之至り難と存
候若前條の議論至當と此案考者之向後此開
之可相成港都之儀之付六ヶ要儀有之候とも
夫々所置難致候小も無之候自國政府之趣旨
を懇親誠實を以て可致との儀之有之松乃

海舟書屋

存意も同松之事之有之候

(文久二戌年二月十五日於東禪寺英國公使

館森山多吉郎開書立石侍十郎認之)

文久二壬戌年二月十七日濟海寺於而津田通江書
佛國之ニストルに對話

彼方

- 一此程本國より圖書差立候趣之而右寫差候候
- 二付執政方之此會晤之節差立積是之私事也三
- ストル位階小進之候間諸事其思召之而此取

11110
扱以下候松國帝より大君殿下は披露申上
候書面之而即委任之信書小者之本書之拜謁
之上進呈之心持之候滑共未夕到来不致以得
之拜謁難出来就而之進々此地引拂歸國之積
之付其節取暇之康之而拜謁被仰付候松仕度
旨申出候

此方

右等之儀之奉細執政方に申上至は松可致旨候
抄致一候

同廿八日對馬守宅於而大和守之ニストルヘレク

海舟書屋

此方對話

彼方

一國書之本紙到来不致候共歸國之康之而拜謁
相願は交渉開届相成日限等前以可申上旨兼
知致一候今日英公使アルコツク拜禮可首
之所座席等之事意小叶ハさ係松子之而登城
不致候得共右座席之儀此度之御本城故先年
西城之而拜謁之節之之此間取之摸松相替候
得共拜謁席於而之素より相替は儀毎之候間
右等之康可致私より可申通旨兼知いたし

法談之趣委細可申論以得共支りり之外國人
所接對向少しく所愛華者之方專要と法存
候歐羅巴各國之而之其國帝他國之ニスト
ルは西會之節座席等如何小も接近致し居ハ
間所國之而も是迄之法法改改外國之ニ
ストル所接待向之各國普通之振合を以取
扱相成候松致し度旨申出候

此方

一右之應老之候時若當今人心不折合之柄
國之典と動し儀之何分難出來者所挨拶者

海舟書屋

之候

三月廿一日濟海寺おゐて大久保越中より通辨官
レツキマニハ對話

彼方

一之ニストル儀近日拜謁相願ハ之就而之此程
英吉利之ニストル拜禮之儀之有不都合有之
候間此以前拜禮之節之振合之改可被下所
中候所敷居際進之候時之思存之ハ得共
若座席之儀相決不申ハ而之拜謁頃合難差定
所改ノ難在茶事之候時之國書之奉國ハ差

席一別段拜謁相願不申心持之旨之旨申出

此方

一以前之西城此度之町中城故治座敷之御模振
 相愛り以得とも拜禮席かゝるて冬同振之旨之
 所中随治爰居除進之候而も圖老上席之相
 成以儀之而尋目等之致禮之規則之も拘り候
 事故何分改メかたき儀之存候得共被申聞以
 趣之應圖老に可下少旨挨拶以多一至候
 同廿七日横濱コニシユル館かゝるて仍幸圖書頭
 岡部駿河守ニストルヘレクルに對話

海舟書屋

彼方

一先年拜謁之節も大君との此間合二十七フ一
 ト之旨之候爰此度治示し相成候繪圖面之而
 も格外懸隔り居候治交情於て薄き被被存以
 一俸謁見之節も大切な致國書之差上候事故
 右を机上ふとに治上之被置候儀之何分治輕
 率之取扱之而各國於て右極之儀之決して
 無之且今般之私ニストル職と相成以故爰
 丈之取扱之候而も相叶申間敷以老西城
 之節も通之候り、異存無之旨申出以

此方

一 御中城之西城と違ひ居間取等教等も多く有
之に委ふ自然 大君との居間合遠く相成候
將共居席控而も替り不申素より圖書小對し
敬禮と盡し以事之而シヤルセタフルと之ニ
ストルと乃階級ふりり礼席に差等之無之右
取扱方各國に振合と相違致し居候と則風習
に異ふ所取て我國かゝるて 大君に向ひ握
りし礼取柄に候つ、大不敬と相成可申只々
敬禮厚く委りり自然嚴格小相成以事之有之

海舟書屋

候此邊萬と了解致し申談に通り之而動并可
致旨申談候

同廿八日同所かゝりて同對話

彼方

一 先年西城之而拝謁仕に節之中に此邊敷三冬
相隔七疊目に罷出に事此度御中城之而之五
冬に相違之相成は同矢張西城に通り七疊目
に罷出度一体西城に於も離れ過に將共初而
故夫之而為相濟に將共外國に在るに之ニス
トル職ふて謁見以多し候節に余程接近以多

候儀之付所國小ても是迄く此礼典より此拘
置おく之ニストル小對して乃此所置首之候
松致し度は音申出は

此方

一 西城之而謁見く舊之礼典未夕不整之付此所
相成は交強而願候之付年授一時假し此式
て相濟は故此度御不城は居出は礼典一例小
之不相成は同如何松は申は而も此度く礼典
相改ノ席と進めは儀も迎も難出来従及履中
談候

海舟書屋

四月八日對馬守宅於てニニストルへレクルは對話
彼方

一 國書差上方之手續是迄度々此談判は座候
得共此談通り之而も 大君と乃此間合搭
外相隔る居候旨右く處此改ノ以下度且以前
之ニヤルセタフへル小候處此度之ニニス
トル小昇進致し候故拜謁席も一層相進可申
既小此度く國書之右轉任く趣申述は書翰小
候濟之ニヤルセタフへルとニニストルとの差別此立不
此下は而も國書差上はとて每益く事之有之

ふと種々言葉を巧之申出候

北方

一右之西城と大城と唐使とふれ所ふふり
大君と乃由間合も自然遠近に相違有之候
得共其敬礼と盡し以意ふ至りて冬少くも相
変候儀も之且兼而取極至以拜謁席と即高
官の者を取扱は極所之者之畢竟以前ニヤル
セ夕フヘールニ而拜謁ノ節ニ進み過ル事小
て此度之ニストル小昇進候邊外小取扱方と
無之此上如何扱被申はても禮典式目等相改

海舟書屋

ノ候儀も難出来と乃旨及覆出説論相成候處
以川是山も萬々兩三日勘考の上候と忠告可
申上旨申出候

第三十一号

千八百六十二年第四月七日日本江戸合衆

國使臣館小於て書也

江戸外國事務執政等々々

久世大和守

両台下小星也

安藤對馬守

余合衆國大統領より 大君殿下小呈せし書翰を受取りしと以謹て台下小報告を是故小右書翰を献呈せんかゝる先余何れの日も大君殿下へ拜謁し得べきや台下余も文通し給はんことを願ふ

右書翰ハ余以て合衆國ニエストル、レシテント乃職と解しむべきの報知あり余此書小添へく右書翰の譯文を台下小呈す所あり恐惶敬白

日本在留合衆國ニエストル、レシテント

海舟書屋

トウンセント、ハルリス手記

亞米利加合衆國大統領

アブラハム、リンコルン

日本 大君殿下小呈す

大良友

合衆國ニエストル、レシテント乃職と為して
数年の間

殿下乃許さし置けふトウンセント、ハルリス氏本國ニ歸り度く願ひ出さし由て余其願

乃如く許容して

殿下と別離を為さんと被命せり

日本政府と最も懇切なる交を大切し為し遂
るを在留中の職分とせ給ハルリス氏ハ江戸
を退去する時方今兩國の間ハ幸ハ結ひたる
懇親の交を堅固し及ひ廣大ハ世人との我
等ハ正直なる志願を

殿下ハ證し且此交より生し来る恩澤の永續
を体とを兩國の人民ハ證するを命たり
者ハルリス氏以前より乃職分と精勤せしハ

海舟書屋

由て余望むらくは同人此度の命を

殿下の悦み給ふ様ハ務む也

耶蘓降世后千八百六十一年第十一月

十四日華盛頓ハ於て書き

殿下の良友たる

アブラハム、リンコルン 手記

大統領の命ふて

外國事務ミニストル

ウイリヤム、エツチ、シウアルト 調印

三三
亞米利加合衆國全權兼ニニストル

エキセルレニシ

トウセント、ハルリス

貴國四月七日附第三十一号ノ書翰落キ其
大統領ノ我 大君殿下ニ差贈ラズ為シ書翰
を呈セラズ人々其許他日謁見セ人々を望
海外、亦付其國書々寫を添テ中越ス、茲其
意を領セリ者々其許今般ニニストル、レニテ
ント之職を解キ先ラ茲、昔其政府より昔

海舟書屋

知所りし由就而も本月廿八日 即ち國第
四月廿六日 拜謁

禮典を取行ふ間四時西洋第十時迄 管以多
さふ、操存候此段回答旁申入候拜具謹言

久世大和守

安藤對馬守

三月廿九日對馬守相渡

神奈川奉行

通々亞米利加交代ニニストル渡來可致趣ニ

付右ニストル神志川表到着有之ハ、祝
 砲打放候筈ニ付到着次第日限刻限等同ハ、
 ニシエルハ何事モハ掛合ハ上松平隠岐守臺
 場ニ而亞國ノ國旗上ケ此方ヨリ祝砲十七發
 為打ハ振可ハ致候尤古ノ趣隠岐守家来ハ
 何事モヨリ可被達ハ亞國旗ノ儀ハ海軍艦奉
 行相談清反ハ振可ハ致候且又右祝砲ノ軍艦
 渡来ニ付而ノ願ニテ毎之ニストル到着ニ
 付而ノ祝砲ノ有之且品川到着ニ付而ハ別段
 祝砲毎之筈ハルリスハ談判相濟ハ間可ハ得

海舟書屋

其意候事

右ノ通ハルリスハ談判相濟ハ趣ヲ以相達候
 筈ノ處交代ニストル候高船ト乘組明廿七
 日渡来ノ由ニ而高船ニ而ハ答砲雖出来趣ニ
 付祝砲ノ止ニ相成ハ事ト存ハ惜共為念相達
 至候右明日外國奉送神志川表ハ相越及談判
 ハルリス候同所ハ相越ハ趣ニ候右若祝砲有
 之方ニ談判取極ハ、前書ノ趣ニ可被取計
 候事

三月晦日對馬守相渡

外國奉行

ハルリス帰國ノ節

所圖書被_レ呈_レ下候_レ由_レ三日申立候_レ得共_レ西國ノ
所使_レ者_レ帰_レ帆_レノ節_レとも違_レひ候_レ旨_レ此_レ程_レア_レル
コツク_レ帰_レ國_レノ旨_レ振_レ合_レを以_レ政府_レより_レ書_レ翰
ニ致_レ一_レ通_レり_レ而_レ兼_レ伏_レも_レ存_レ覺_レ東_レ候_レ間
近_レ日_レ之内_レハ_レル_レリス_レ方_レに_レ何_レもの_レ内_レ罷_レ越_レ申_レ試_レ候
松_レ可_レ江_レ致_レ候_レ事

海舟書屋

恭敬して

余_レミ_レ亞_レ米_レ利_レ加_レ合_レ衆_レ國_レマ_レイ_レエ_レス_レテ_レイ_レト_レ大_レ統_レ領

小_レ復_レ也

貴_レ國_レ欽_レ差_レ大_レ臣_レト_レウ_レニ_レセ_レント_レハ_レル_レリス_レ儀_レ歸_レ國
ニ_レ望_レあ_レふ_レに_レより_レ共_レ候_レ許_レ允_レさ_レま_レし_レ趣_レ領_レ諾_レせ_レり

同_レ人_レ我_レ國_レノ_レ名_レ々_レ在_レ留_レし_レ其_レ職_レ掌_レ精_レ勤_レせ_レし_レを_レ感

し_レ且

殿_レ下_レ乃_レ其_レ人_レと_レ侍_レて_レ差_レ越_レせ_レし_レ小_レ儀_レり_レ双_レ方_レ臣_レ民
の_レ幸_レ福_レふ_レ事_レ則_レ殿_レ下_レ友_レ誼_レニ_レ至_レ渥_レふ_レ由_レを_レ微

其不足を補委細く議し老中より貴小事
務大臣に可申入候

文久二年戊辰四月 日

御諱 御印

亞米利加合衆國

エキセルレニシ

海舟書屋

外國事務大臣に

以書翰申入の貴國政令全權トウシセント、ハルリス、
エスッコイル諸國之聖所より其政府於て許容
せられしより此のトウシセント、ハルリス、エスッコ
イル各條約交換の初よりチッコマキキヤセントとして我
部府に呈出せる殆五ヶ年の久しき及ひ我國
の事情を熟知し法事隔意なく懇篤に互に板
便宜の要並ありしより貴國之懇親の篤きを
言ふに及り此條約を結ひし他の各國に對し如
親深あつきに至るを實にハルリスエスッコイル

乃切骨感謝不堪と猶兩三年の間續留あらん
と誠意で申入しかとも貴國政府に以て、達
せしむ哉後任の者命せらるる今般帰ふ乃命あ
るを不得止事ふして實に遺憾の至るれハ猶
再渡あらん事望む所ハ候尤代任乃者も貴國
政府掄撰く上差越さるる事故新古の差別あ
らましけりハ是迄と同様相心得万端懇篤に
所置せらるる人と望む所ハ候拜具謹言

文久二年戊辰四月

久世大和守

安藤對馬守

海舟書屋

祝砲之事

亞米利加軍艦渡來の節祝砲

儀之舟見込の趣相伺の書付

井上信濃守

此程亞國官吏に引會の節有之森山多吉郎差
遣の要右引會の序近日亞國軍艦渡來致し

二付而之右船砲泊之上日本國を祝ふはた先
發砲以爲一候若くは日本國を祝ふは亦國を
祝ふ同様に砲致し其候儀を相成り敷哉何事
右之趣書面を以申立は積之候時共一應多
吉郎限り成否に換取義知致し度旨官吏申聞
右之私書申上無之由而之挨拶難成
趣申談置は由申上之付勘弁仕候事西洋諸
洲之而之互之發砲致しは儀國體之可有之
は得共御國之ありて是右儀之禮儀各之候之
付此方之此方之礼を以差向前書軍艦渡來祝

砲相發候は支配組頭臺人清服之而船中
差遣し之及挨拶は私可致旨程多吉郎申
合其候為申上之要右之冷外取扱之而和親
之詮各之支那之而も祝砲を不仕和親之國々
不快之候旨可相成之案砲致し可旨旨申聞
候由之付猶備後事申談品々議論仕候處見込
之趣異致之て再應談判中今廿七日於所用所
私共は面會仕度旨官吏申出は之付應接仕候
事前書祝砲之旨旨即答義度旨申上は得共私
共見込一決不仕候旨勘弁之上追而可及挨拶

三十三
旨申聞置候儀有之私勅并仕候事之而西洋諸
邦之元來風俗一致之場合より禮節等も都而
同極之所置施し候儀互之被行以譯之可有
之候得共國地を替風俗と異小致し候上之禮
節等丈々相變以儀中迄も無之義理明了之候
要右を自國之風之引附同極之禮節可及行旨
申聞以を其儘兼届以而之御國之禮節彼亦小
固循致し以筋之而一方一右等之儀諸般之押移
之候而之御國儀之も拘り可中裁否不容易
時節柄且此程傳書取し趣等も有之若彼申分

を拒之夫之為戰爭等醸し以相成候而之無
算之至之付其邊之可否とも熟考仕以儀之有
之語り前書し趣之彼我之禮義相互候得之可
然儀之而素より双方共不伏之儀と押付一極
之以多し右之而禮義相成以之申筋之無之殊
小礼節之國之大事万一分般之彼國禮之習ひ
新規御國禮相互候相成以而之自然左社之
柱礎を引起以筋之も相當し以之外之儀之付
矣張此上とも且小國禮を以相當し所置相施
し以取計極く旨極く妙右之而兼伏不仕候

ハ、是迄魯亞使節船等渡来ノ節被祝砲致
シ以候旨之旨等申付所カハ以候方可然哉ト
奉存以右ニ備後等ト各異存ニ付一名を以申
上候尤差向居以候ニ付速ニ此下知所度以候仕
度奉存候儀之此段奉伺以上

二月廿七日（安政四年）

亞米利加軍艦渡来ノ節祝砲之儀

ニ付見込ニ趣相伺候書付

岡田備後守

海舟書屋

此程亞國官吏引會ノ節有之森山多吉郎差是
以要右引會ノ節近日亞國軍艦渡来致一候ニ
付而右船滞泊ニ上日本國を祝一以た先度
砲以多一候旨ニ付日本國カ有テ亞國を祝一
同祝發砲いた一候儀ハ相成旨敷哉以以是
右ニ趣書面を以申立候積ニ候旨共一應多
吉郎浪成旨ノ摸松義知一以度旨官吏ノ旨
右ニ私苦中ノ旨以上之旨ニ候而ノ挨拶難成
趣談置以由申聞以ニ付勤弁は候事西洋諸所
ニ而之旨ニ發砲いた一以候國禮ニ可旨之

候得共沖國之公而てハ右件之礼義無之候之
 付此方之禮を以差向前書軍艦渡来祝砲に
 發以之支配組既之人借服之而船中は差是
 一丈々及控抄以取可致之於多吉郎に申會甚
 段為申入以受有之冷而取扱之而和親之詮
 旨之支辨之而も祝砲を不仕和親之國之不快
 之存以旨可相成之發砲以多一是應之旨申聞
 候由之有猶信濃守申談品々評議仕以處見込
 之趣異存之而再應該判中今廿七日猶沖用所
 知而て私共は面會仕度旨官吏申出候之付應

接仕は處前書祝砲之旨無即善兼度旨申聞以
 済共私共見込一決不仕候間勅辨之上可及扶
 抄旨申聞置以儀之有之私懇意仕以受之而之
 祝砲之儀之沖國之禮之旨之限之勿論之候得
 共元来外國船之在是申田箱館等沖港相成
 和親之條約之旨取結有之由之則
 所祖法之涉變革有之由儀之而方今外國之涉
 接對之由所置是迄之由制度等法遵守難は遊
 時勢之有之尤沖國害可相成之見込以儀之假
 令彼何程申歩以之由容易之不應限之勿論以

海峽強而く差障無之分ハ丈夫應レ被遣方穩
當且商港あるて是迄一切發砲不為致事之候
得之細も毎之ハ海共和親ノ慮を以彼ノ所國
を祝レ發砲以多レ此方ニ而テ祝砲レ禮無之
以迎及防候ハ、此儀之完成之も可相成哉
候海共彼不満之存レ候之必定ニ而素々時負
應對等レ禮節ト冬譯違ハ祝砲以たレ遣レ候
トテ所國レ禮節を汚レ以筋之ヲ聊有之ヲ敷
此方ニ而テ禮節ト有之ハ海候トモ彼之取候
而テ格別難有相心得可申達々差違ハ引會筋

も有之彼憤怒ト蓄居候折柄所國レ涉恥辱相
成候儀共不奉存以同亭餅先を折キ和親ノ姿
を顯レ歡喜ト為抱置以方所爲可成哉之付
彼レ求之應レ發砲以多レ答禮レ趣意相示レ
候松仕以方名義之ありても可然レ奉存以方
箱籠レ儀之德業之相障發砲不致旨意而引會
も有之儀之付相終長崎レ儀之差支有之難量
以同當港限レ積中談若長崎表レ儀も同松相
願候ハ、何モ同所奉存以打合レ上進而可及
挨拶旨申聞猶相同候松可仕候右レ信濃寺ト

是異存之旨一名を以申上候尤差向き候儀了
付早々沙下知此座に任度奉存に依之世段
奉伺候以上

三月廿七日

井上信濃守岡田備後守より西墨利加軍艦祝
砲に依之付銘々異存有之丈々見込に趣相伺
候書面被成沙下熟覧勘辨仕候要備後守見込
に趣に和親に席を以所國を祝に茂砲に依
此方之而之祝砲に禮無之候間及所候ハ、此儀

海舟書屋

之丈成にも可相成哉之候得とも彼不満之存
一候に必定にて追々憤怒と蓄居候折柄辨先
を折き和親に姿と顯に歡喜と為抱置に方沙
為可然哉之付茂砲答禮致に方之可有之と
乃首信濃守見込之而之旨之國地之習風俗を
異小致一候上ハ禮節等丈々相變に依之義理
明了之候處強而自國之風之引附同格に禮節
可取の旨申出候之其後兼居に而之所國に禮
節被等小致に筋之而右等之習風諸事之押
移り候而之却而彼の為之新規之所國禮相互

候相成自然左様の儀を啓き以勅にも相當
可致旨猶申談甚上とも兼伏不仕候は是迄
魯亞兩國使節船等渡来り節も彼我祝砲以多
一俣各國俗を殊も一禮節も亦隨而變り以儀
之付彼冬立つを以て禮と一我々度をも以て敬
と致し候類都而相及し以儀之而一々吻合致し
候こと彼と我と候致我を易し以半而ハ彼我
とも適情の場合こと至り難き儀之而其國小

入て其國俗に隨ひ直情適意を互に抑候事即
ち禮節に根源小有之候を勿論儀之冬候得
共出入り軍艦祝砲等儀ハ是迄陽國地了無
之は當彼小致し新規に一條目を添は相歩
候際とも進而も航海の業相用け地國に着船
仕は即各國一俣に規則に隨ひ互に祝砲相發
し候事小不相成以而も難相叶左はハ、自國
上渡来り節も相互に祝禮と以儀小押移り
候に自然に勢ふて其節に敢而怪し以者も有
之間敷詰り只今互に祝砲相發し以連敷而差

障り候儀も無之に得共以り右等々時勢小
 も押移り不申候以前萬國一体に紀律も相心
 得且妄之彼小致ひ只々彼ら一時に情を慰先
 候迄に見据てて應砲等致し候而も必らず不
 規則に慮も有之只々一時に思嚇の為其真似を
 致し候迄に儀之而萬國の誹笑と招き以て必
 定之可有之丈迄に處を彼ら祝砲相祭し以禮
 意不應し以丈を此方禮節と以相應に私為と
 遂談判にのり可然儀之而諸り官吏の口氣共
 外推考仕候交り會筋に序森山多吉郎申出候

海舟書屋

程に儀之而祝砲有無に儀ハ只々言か、里了
 相成り六ツテ敷中暮に迄に趣之相与主意に
 所ハ迫々軍艦愈渡來致し以儀之右系し候一策
 之も可有之哉右等領未に禮節親睦に大體小
 關里に儀無之に同毎々申上候通り官吏出府
 儀被作渡に節ハ萬事盡く氷釋可在哉と奉
 存候間早々右等々此方儀に追々此方儀も航海
 儀に奉致し候節ハ右等々儀に子細も無之候得共
 丈迄に處に彼方祝砲に禮儀に應し以丈に禮

節勘辨致一應對可致旨被仰渡可然奉返候
私共評議仕被成出下々候書面式通出勘定
奉返相廻一此段申上候以上

四月

海防掛

大目付

目付

亞墨利加軍艦渡来一節祝砲一候二付
下田奉行相伺以趣評議仕上上書付

海舟書屋

松平河内守

川路左衛門尉

水野筑後守

塚越藤助

中村烏彌

設樂八三郎

亞墨利加軍艦近日渡来一節評議一候一以之
先發砲一候一候答二付評議一候一以之
上祝一同相發砲者之度旨同申官吏申立右取
計方下田奉行見込區々二付銘々相伺候書面

一覽仕候至井上信濃守見込趣之國替り
俗異事不上等禮節相愛り候之申迄も無之
相分り居候番自國之風之引付同格之禮節
可互行旨申上候之其儘兼居彼國禮之習ひ
候而之自然左様之押移り以基も相成以
之外之儀之付来之國禮之以相當之所置を
施し以之積申上右之而兼伏不仕候ハ、是
迄魯亞使節船等渡来之節彼我祝砲ハ以
儀無之旨申上聞及所ハ方可然旨申上岡田備
後守見込趣之方今外國所接對之以所至是

迄之御制度以遵守難被遊時勢之旨之尤此國
害可相成哉と見込候儀之容易之不應後勿論
之候將共強而差障無之分之夫亦應之此遠ハ
方穩當之而祝砲以多ハ是候迄御國之禮節之
汚ハ候筋之旨之同敷殊之迄々差違以引會
筋も有之彼之歡を為抱以方所為可相成哉之
付旁求之應ハ發砲ハ以答禮之趣意相示ハ
候方可然旨申上候之付勤辨仕以當祝砲之儀
備後守見込之而之強而之差障無之旨申
上候將共是迄御國知由て更之右儀之禮節每

之候を官吏之氣を取以て逆奪夷之習俗之隨
ひ彼國禮を取以て儀評判記等に出候而之
所國辱不相承之難中彼國風小習ひ候路
一事相同之候ハ、此後所國風と申切候儀
難取新儀成行可申魯西亜嘆哈利使節等冬
彼之而取新候祝砲より所國に斟酌以て多
以程之儀之候番和親之康を以て自出之法
引有所國之儀も同儀祝砲いたし候儀取
乃儀之其摸取之勢進々外夷之習俗之導き
遂之を自國信奉之教主を拜禮以て其教

をも不奉候而之和親之詮無之採勸込以源
有之哉も難計元來國異之風習も同か
ら之儀之自出之道理之有既小先達而魯西亜
使節長崎表に渡來之節双方之禮式之其國
之作法之可任者之横文字書付差出其通互
ひ候程之儀以て彼我各其國之禮節之相用相
當之筋より以て小不避之頑夷之候共是等
譯を以強而不平を抱以筋可有之謂之無之和
親之主意を押し候邊之此方小渡來中之此方
之禮節之隨ひ以て其儀當之筋之而信濃を見

込之趣至當之論と奉存以間同人書面之方に
伺之通函下知有之可然奉存候此為申上候以
上

巳四月

各國公使に

以書翰申入候我國西洋諸國と和親交際あり
小し祝砲之儀と我國の規律小ありと
とも今般西洋通規之故を以我國きたる神奈
川長崎港之地に入津せ候各國之軍艦は之我

海舟書屋

砲臺或冬軍艦之而一々年を度ツ、我國禮小
祝砲あり乃同小答砲を為條約所結ひ
各國の之ニストル初而我國に來着るふと我
國退去之節と是又我砲臺或冬軍艦之ありて
祝砲す處一右之而其許異存無之哉速之報答
ありんと候望む拜具謹言

文久元年十二月十六日

久世大和守 花押

安藤對馬守 花押

各國公使

以書翰申入候我國西洋と和親と結ひし上
 于プロマチイキアケント在留した先初而江
 戸ふ来着く時おらひ其帰國の節ふ於て其者
 乃等級の應し品川灣に砲臺を於て祝砲を射
 ふ應し將國の禮ふ對し祝砲を射て其意を
 示す候事ありにり猶談判の上所置可及候
 拜具謹言

文久元年十二月

久世大和守 花押

安藤對馬守 花押

海舟書屋

文久二年壬戌三月十九日

日本

百三番

第三十九号

千八百六十二年第四月十九日日本合衆國使

臣館ふて江戸外國事務宰相等々々

久世大和守

兩名下二呈ス

安藤對馬守

第一月十五日附の貴翰を以て外國軍艦神志川

及び長崎に到着すは若くは祝砲と交換し又外國「ミニストル」此地に到着の時及び此地より出帆の時之が為し祝砲と放りし意は就き余に報告せし

合衆國の蒸氣船「ワイオミング」船甚速此地に到着せんを待り是レ「カ、ハ、プロイシ」人を乗せ來る船あり此人は合衆國大統領乃命授け「ミニストル、レシデント」は余の跡役と勤むる者あり

右「ワイオミング」船其祝砲と貴國乃為し放り時

海舟書屋

神奈川港より之は答砲と放りし人且つ又台下何れは亦は放り右「プロイシ」人の為し祝砲を放り余之と聞んる為し此書と呈し○速し此書の返答と授け給ふんと欲請ふ忠惶敬白

日本在留合衆國ミニストル、レシデント

トウニセント、ハルリス 手記

祝砲手續書

一 去ル午年中亞國前公使ハルリス一旦支那に相
 越候節再度下田表に罷越候ハ、祝砲打方
 奉願の旨申残一候趣を以同所奉約の申立旨
 之候處彼我禮節相異り以上各互之旨乃礼節
 を以挨拶可致筋之旨彼方祝砲打の旨之北方
 亦て各相當之役人麻上下之面謝詞申述候事
 可然旨此迄定相成

一 同年中英國軍艦本條約為取替として江戸表
 に罷越の節も同様に取扱治症候其後亞米利
 加國の使被遣右廻船出帆の節祝砲打方

海舟書屋

被成下度候ハルリスより申立候將共沙開屆無
 之歸國の節も同様に申立候一とも是亦沙開屆
 不相成候處其翌西年七ウスケニ殺害了達候
 一條之旨英佛公使横濱表に歸府の節祝砲打
 打方被成下度段強而申張其時限り沙開屆相
 成迄臺場を以て兩國懇親を表一候建廿一發
 打方有之其後蘭公使長崎表に歸府の節も
 英佛同様に譯柄之旨出府の節も同様に取扱
 受度旨申出是又迄臺場を以て祝砲打方取
 仍相成候同年十一月廿六日歐羅巴各國に

使被差遣候ニ付右廻船出帆ノ節祝砲打方ニ
儀英國先公使アールコックより申立別格乃
譯を以て聞届相成則彼方於て祝砲致シ候得
共此答砲ニ無之候

一 同年同月廿六日屯界一般ノ規則及調之上
海國ニも祝砲ノ制度及立可成積ニ付右規
則及同合被成度殿對馬守殿及勤役中同人々
及談者之十二月十二日右規則覺書ニ添書簡
差出右訳未出來不致以內軍艦入港ノ節神奈
川長崎兩所ニ於て國禮ニ對シ候祝砲ニ一ヶ

海舟書屋

年一度ツ、并立留シ公使來着退去ノ節とも
神奈川ニ而祝砲及打放可被成旨此書翰を以
此懸合相成亞佛等々何とも此返事不申上候
至同廿一日在留公使來着退去ノ節ニ江戸港
ニ而此打方相成可然旨アールコック及對話
節申出其通り此談決相成同廿九日右此返事
旁各國公使來着退去ノ節ニその位階ニ應
江戸港ニ於て祝砲及打方可被成國旗ニ對
祝砲ノ方ハ追而此此定可相成旨各國公使
以書簡此達シ相成

一當戊二月十一日右に倭に付猶又外國奉約に
以書簡各國打放の規則を書記官返問合候番
同十二日亞國に、十六日佛國に、十九日荷蘭
に、銘々自出所用の禮式申來り官位の高下
に應じ打放の員數等聊異同有之候に付、御國
從來の禮交誼も有之且傳習所用相勤の處も
此症候間荷蘭の制度を用相成は方可然段外
國奉約評議申上の番未だ此下知不相成内三月
廿七日亞國公使ハルリス交代の者渡來致候
節祝砲打方の儀申出之ことハ身分の不

拘都而十七發神奈川に於て此打可相成候に
談決相成其後此書匠と以被仰渡候時共亞國
當公使高船來組渡來に、應砲難有之に付
追而軍艦渡來に節此施行可成旨當三月廿
七日四月七日對馬守殿此引合之而此談決相
成居に、此程同國軍艦渡來致に、間此約束に
通十七發此打放有之を、兼而此仰達に、此書簡
に面も有之候間、祝砲打方規則此調に、上此此
治定の期に至り候に、打放員數等も、猶増
減も可省之且國旗に對し、祝砲の儀未だ此治

定不相成旨同國書記官ホルトマン迄私書
伺之上以書簡申遣置此事之由度候

成九月

外國奉約

祝砲一事大旨我邦の禮節も無之との論を
主張すといふ共已も従前乃祖法を改え用
港を許すの今日も立て猶區々の小節を争
ひ以て舊來の習俗と維持せんと謀ふ何を
事の大伴も通せしめて眼孔の小る程や況
や此時已り長崎も於て軍艦を購ひ海軍と

海舟書屋

興を盈して其禮章とも各國政府に通知
せし後亦も軍艦の定式も祝砲も廢棄を
ふれ主意亦も勿論真も矛盾不通の論と
云盈し予等も米國公使ハルリス嘗て安藤
對馬守の邸も於て談祝砲の事も及ひ互も
彼我禮節も主張し抗論を以て公使云然ら
ハ貴邦軍艦咸臨丸乃我國も航するや式の
如く互も祝砲せしむ如何と其時傍も互も
ふ人々此答も各々其の對馬守も以て
あらんとに汗を振りし對馬守も其

小候我咸臨艦の祝砲をせし貴邦も入る
貴邦の俗も従ひし也其國の軍艦も我邦も
互てハ我俗も従ひしを適當なる處を
是とありしれハ公使も言ふくして去まり
と此話一時の撤放ハ賞を以て以て此も亦
當時内外鑿情勢と想ひ見ざるべきあり

開國起原卷二十四

